◆東院園池地区の調査―第271次・第276次

1　第271次調査

はじめに

東院園池地区の復原事業に先立ち、水田の畦畔、里道など、第44次および第99次調査において未調査地として残されていた部分を調査した（図14）。

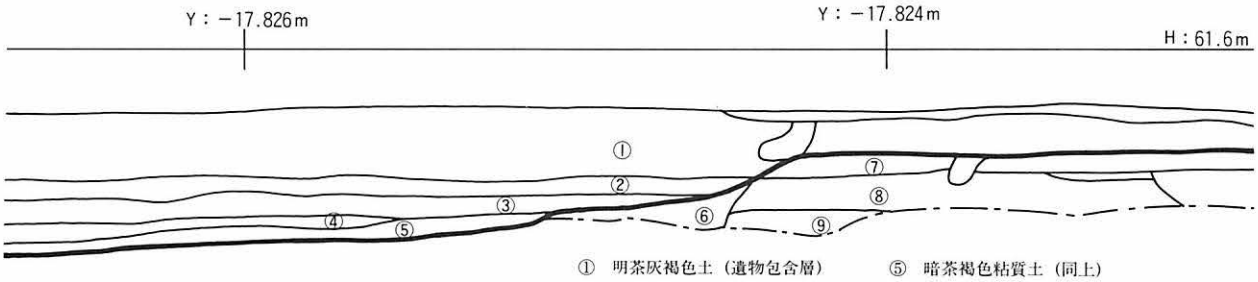
畦畔部は第44次と第99次調査区の間に残された幅３ｍ、延長45ｍの東西に長い区域で、ここには園池の東岸から中島中央部が含まれる。園池の遺構は奈良時代前半期の下層遺構と、奈良時代後半期の上層遺構の２時期の遺構が重複していることが、これまでの発掘調査で明らかになっていた。しかし、この地区における最初の調査であった第44次調査の時点では上層と下層という２時期の園池の存在を確認できず、調査は上層園池の検出で終わっていた。その後、第99次調査では、下層園池を発見、上層遺構の調査後に上層遺構をとりはずし、下層遺構面まで下げている。今回の調査地は両調査区も含めて、両調査区を再発掘する形でおこなった。したがって、今回の調査地をはさんだ北側の第99次調査区では、上層の洲浜礫敷きははずされ、下層園池の池底、つまり地山の砂層面が露出し、南側の第44次調査区では上層園池の洲浜礫敷き面が露出していた。

ところで、園池の復原計画の基本は奈良時代後半期の上層遺構を展示することにある。景石は遺構を合成樹脂で強化し、露出展示する。洲浜礫敷きは第44次調査区のように上層遺構を残している部分では、上層の洲浜礫敷きの上に新しい礫敷きを10cmの厚さで敷きつめ、この新しい礫敷きを展観に供する。つまり、上層礫敷きが残っている部分ではこれを地中に保存した上に、上層礫敷きを再現するという考え方である。したがって発掘調査もできるだけ上層遺構を残す方針で臨んだ。下層遺構については要所にトレンチを入れ、確認するにとどめた。この下層遺構確認調査は第276次調査の一環として次数を改めて実施したので本報告とは分けて記述する。

検出遺構の状況と出土遺物

上層園池　上層園池SG5800Bの遺構は畦畔下にあり、保存状態は良好であった。幅３ｍの範囲ではあるが、この中に東岸立ち上がり部、池底の礫敷き、および中島中央部が含まれる。

東岸立ち上がり部は、図13のように池底の緩やかな立ち上がりにつづいて、東岸斜面が約35％の急勾配で立ち上がる。東岸斜面が終わるとその外側は、ほぼ平坦な面が東面大垣までつづく。この平坦面にも礫敷きがなされている。礫敷きは東面大垣西雨落溝の西側に残る礫敷きに連続するものと考えられる。洲浜の外側に広がる礫敷きは、第120次調査や第276次調査などでも部分的に検出し、また園池北側の第110次調査では園池に付属する建物の周囲に敷かれた礫敷きを確認している。これらのこと



① 明茶灰褐色土（遺物包含層）
② 暗灰褐色砂質土（池内部の堆積土）
③ 暗灰褐色粘質土（同上）
④ 黒茶褐色土（腐食土層・同上）
⑤ 暗茶褐色粘質土（同上）
⑥ 茶灰褐色砂質土（洲浜を形成している層）
⑦ 明茶灰褐色砂礫土（池外側に広がる礫敷層）
⑧ 灰褐色砂質土　⑨ 暗灰褐色砂質土

図13　第271次調査上層園池東岸断面図

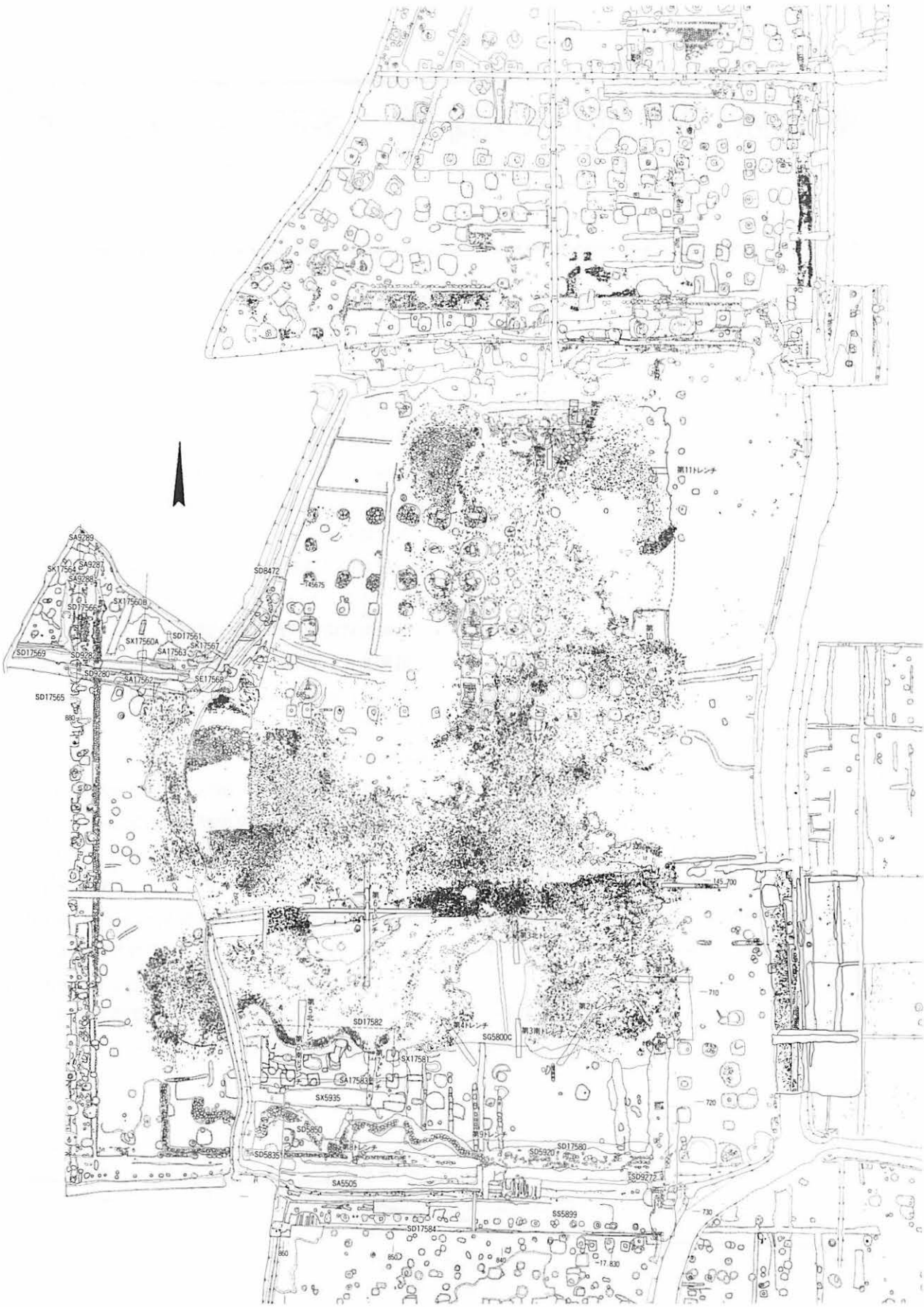


図14　東院庭園遺構図（第271次・第276次調査）　1：500

を総合すると、大垣と板塀で囲まれた園池空間の地表は植栽地などを除いてすべて礫敷きで覆われていた可能性が高い。

敷かれている礫は、池底では比較的小さい。径5cm以下の礫を主体に、径5～10cmの礫が混ざる。しかし、東岸や中島の斜面部は少し大きくなり、径5～10cmの礫が目立つ。洲浜外側の礫敷きは径5cm以下の小礫を多く含み、表面の仕上がりもやや粗い。

中島は東西11m、南北9mの大きさである。残存している中島の高さは池底から約40cmであったが、これは本来の高さではない。中島中央部には洲浜礫敷きが残っていない。削平された結果であろう。

景石は東岸および中島の斜面部に径50cm以下の小さな石が全部で11石残っていた。石質は安山岩5石、花崗岩系4石、チャート1石、溶結凝灰岩1石であった。

東面大垣地区　東面大垣は南北延長20m分が里道下に未発掘地として残っていたのでこの部分を調査した。

東面大垣の積土自体は失われていたが、大垣の断ち割り調査によって大垣から大垣基壇にかけての掘り込み地業を確認した。掘り込み地業の幅は3.3m、深さは15cmほどであった。復原される大垣基底部の幅は約2.7m(9尺)であるから、掘り込み地業は、ほぼ大垣部分にとどまっていたことになる。大垣に関連する遺構として、他に西雨落溝を検出した。西雨落溝の側石は抜き取られていたが、底石は部分的に残っていた。底石は玉石を2列に敷き並べたもので、幅は40cm強。西側溝の西側、つまり庭園内部には前述のように一面に礫が敷かれている。

遺物　若干の瓦とごく少量の土器が出土した。軒瓦は7点、平城宮瓦編年のII～IV期（奈良時代前期～中期）のものであった。　（高瀬要一／計測修景）

2　第276次調査

はじめに

第276次調査は、第271次調査に引き続き、東院園池地区の復原整備事業に先立ち、遺構解明のために行った。

調査区は以下の3カ所に分かれる。①中央建物西側地区の調査（約180m²）、②第44次調査区で残した水田の畦畔部（約90m²）および第44次調査区の精査（約680m²）、③下層園池の補足調査。①は第99次調査区の西、第120次調査地区の北にあたり、第120次調査で検出した南北塀や南北溝、池洲浜の状況確認を、②では南面大垣の遺構確認をそれぞれ目的とした。③では下層園池（SG5800A）の状況や下層園池造成前の掘り込み地業（SG5800C）の確認を目的とした。

中央建物西側地区の調査

中央建物西側地区の東部と南部には法華寺の集落から続く近現代の水路SD17569があり、第99次調査区・第120次調査区との境をなす。溝の屈曲点に掘削された近代の野井戸(SE17568)とともに奈良時代の遺構面を削平しており、上層園池SG5800B西岸北端の洲浜は残っていなかった。厚さ20～30cmの耕作土の下が奈良時代の遺構面で、東辺部のみが地山、他は整地層であった。調査区中央で掘立柱南北塀3条、南北溝4条を検出したが、これらの東側は上下2層のバラス敷（SX17560A・B）で、洲浜周辺の平坦地にもバラスが敷かれていたことが判明した。

遺構の時期変遷は『年報1994』に記された第243次・第245-1次調査の所見と矛盾しないため、以下、この時期区分に従って報告する。なお、A期に先行する時期をA0期とする。

A0期の遺構

SD17561　黄褐色粘土の入る幅20cmの溝。断続的に約3mにわたり検出した。

SA17562　8尺等間の掘立柱南北塀。B期下層バラス敷(SX17560A)の下で3間分検出した。南へは延びず、北へ続く可能性は考えられる。

SA17563　SA17562に取り付く掘立柱東西塀。B期下層バラス敷（SX17560A）の下で1間分検出した。

A期の遺構

SX17560A　下層バラス敷。径数cm～10cmの礫層からなり、約10cmの厚みをもつ部分がある。

SD9280　石組みの南北溝。第120次調査区でも検出している。調査区南半部では側石、底石の遺存状況がよく、北半部では溝底の痕跡と側石の抜き取り穴が検出された。底石の残るところでは、溝底幅約40cm、縦断方向で約5%の勾配をもち、一部で溝底の西端が下がるため、横断方向で20%の勾配をもつ。東の側石の東側は下層のバラス敷（SX17560A）につながる。

SK17564　径約1.7mの土坑。奈良時代前半の土器が多く出土した。

B期の遺構

SD17565　素堀りの南北溝で約5m分検出した。幅約1m、深さ約15cm。北で浅くなり、土坑SK17564を切る。

SA9287　掘立柱南北塀で、第120次調査区でも検出している。調査区北端付近で柱穴を1基検出した。

C期の遺構

SA9288　北で西に約3°振れる掘立柱南北塀。第120次調査区でも検出。北端付近で柱穴1基を検出した。

SD9282　SD17566の下層で確認した南北溝。バラス敷の幅50～80cmの溝底が残り、側石を欠く。SA9288の東雨落溝であろう。

E期の遺構

SA9289　掘立柱南北塀で第120次調査区でも検出している。4間分を検出。柱間10尺等間。

SD17566　SD9282を埋めて、ほぼ同位置で作りなおしたSA9289の東の雨落溝。石組みの南北溝で、側石数石とその抜き取り穴が部分的に残る。溝底の幅は約30cm。この溝の東側には上層のバラス敷が広がる。上層バラスは約10cmの厚みをもち、下層バラスとの間に一部で間層を挟む。

その他の遺構

SD8472　調査区東端で検出した約10度北で西に振れる暗渠。直径5～10cmの礫を使い、幅40cm、厚さ約10cmの礫層が残る。

SK17567　拳大の礫が詰まった5基の小規模な土坑中、最大の土坑。中世の瓦器が出土した。

南面大垣周辺地区の調査

第44次調査で検出した遺構の他に、今回はSD17580、SX17581、SD5830B、SB17582、SA17583を検出した。新たに得た知見の概要を記す。

A0期の遺構

SD17580　幅約2mの素掘りの東西溝。第8・9トレンチおよびSD5830西側面で溝北肩を確認した。水が流れた痕跡はない。

A期の遺構

SD5835　石組東西溝。SD17580を埋めた後に造られている。西半部では底石のみ、東半部で底石と北側石が部分的に残存している。西の第120次調査区ではこの溝に下層園池SG5800Aの南岸西端からの排水南北溝SD9275が合流していた。

SX5935　幅1.6m、深さ10cmの東西方向の布掘地業。

SX17581　幅1.3m、深さ0.7mの南北方向の布掘地業。SX5935とは交わらず、南はSD5850で切られ、北はSG5800Bの洲浜礫敷で覆われる。

B期の遺構

SA5505　東院南面大垣の築地塀。南半部は削平されているが、北半部は水田の畦畔として利用されていたために遺構の残りがよい。掘り込み地業は幅約5.9m、深さ約0.6m。この上に築地の積土が約0.5m残る。今回の調査区西方で行われた過去の調査では、SA5505に先行する掘立柱東西塀SA5010を確認しており、その東への続きを検出すべく、長さ約5mのトレンチを設けて精査したが、想定位置に柱穴は存在しなかった。

SS5899　南面大垣築地塀SA5505の南側寄柱列。

SD17584　幅0.7m、深さ0.3mの素掘りの東西溝。南面大垣の南雨落溝。

SD9272　幅0.5m、深さ0.3mの石組東西溝。南面大垣の北雨落溝。

SD5850　SD9275と同様、下層園池SG5800Aに取り付く石組蛇行溝。SD9275を常時の排水溝、SD5850を曲水の宴に用いた流杯渠と考えていたが、層位的にはSD5850が上層で、併存はしない。

SD5920　SD5850の下流にあたる幅約1.8m、深さ0.2mの石組東西溝。数カ所で側石が数石残る。この溝は西に続くSD5850とは異なり、著しく攪乱され、本来の石組溝の内外に石が散乱している。

C～D期の遺構

SD5830A　上層園池SG5800Bの排水溝。現状では幅約1.7m、深さ約0.5mの素掘り溝。溝底の5～6mに一カ所、一対の横木が遺存する。横木の上に木樋を据えて暗渠としていたと考えられる。

SB17582　桁行5間以上(柱間8尺等間)、梁間2間以上(柱間8尺等間)の東西棟と考えられる。北側柱筋はSG5800Bの池底礫敷のため検出していないが、柱穴想定位置には瓦片が多く散乱する部分がある。

E～F期の遺構

SD5830B　SG5800Bの排水溝。南面大垣下ではC～D期の木樋暗渠撤去後、石組溝とする。溝底の堆積層から奈良時代後半の木簡が多数出土。

SA17583　SB17582の南側柱筋に重なる3間分（9尺等

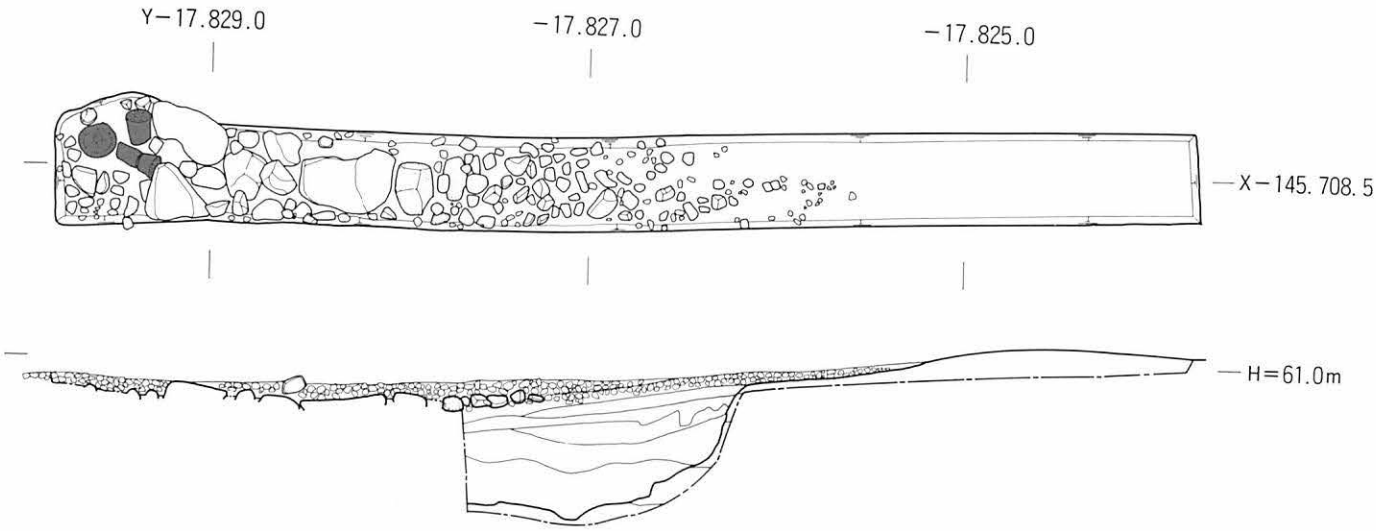


図15　第276次調査第1トレンチ平面・断面図　1：40

間）の掘立柱東西塀。

下層園池SG5800Aの調査

第99・120次調査で確認している下層園池SG5800Aは、池岸に沿って30cm前後の扁平な安山岩の玉石を2～6m幅の帯状に敷き、護岸として人頭大の石を積むものであることが判明している。しかし、園池南半部を調査した第44次調査区は上層園池を検出したに留まっていた。そのため、下層園池の状況を究明すべく、園池の岸および中島SX8460に第1～第6トレンチ、第99次調査で検出した上層園池北端の築山SX8457の南岸に第13トレンチをそれぞれ設定した。

第1トレンチ　上層園池礫敷の数cm下に径40cm前後の扁平な玉石と拳大の礫による石敷面を検出した。この石敷の中に平城宮瓦編年第II-2期の軒丸瓦6314A　2点、6308Aa　1点が入っていた。下層園池を養老5～天平末年頃に造営し、天平勝宝年間に上層園池に改修したとする第99次調査の見解と矛盾しない。

第2・3北・4トレンチ　上層園池礫敷の数cm下に拳大の礫を敷く下層の池底を検出し、南岸の岬は下層園池造成時に造られたことがわかった。

第5北トレンチ　北端では上層園池池底の15cm下で下層園池の玉石石敷の一部を確認した。その南には下層の石敷を切る柱穴2基がある。ともに掘形には下層の石敷に使われていたと思われる玉石が入り、抜取穴は上層園池の池底の礫敷が覆う。2基の柱穴は上層園池に伴う建物になる可能性も考えられる。

第6トレンチ　中島SX8460の一部を削り込み、新たに北と南に中島を拡張していることがわかった。しかし、この拡張が下層園池から上層園池への改修にともなうものか、工程上の差で生じたものかという問題や、下層園池が中島をともなっていたかという問題は未解決。

第13トレンチ　下層園池にともなう玉石敷は、築山SX8457の周辺の範囲には広がっていないことがあきらかになった。

掘り込み地業SG5800Cの調査

下層園池のさらに下層には掘り込み地業SG5800Cがあることが第120次調査であきらかになっている。今回、第1・2・3南・4・5南・7トレンチでこの掘り込み地業を検出した。これは、岸側から急勾配で掘り込み、その底は下層園池にともなう石敷の0.6～0.8m下にある。また、第99次調査で園池東岸の北岬南半部に設けた第10トレンチ北壁も今回精査、SG5800Cを確認した。この掘り込み地業の東縁は第10トレンチの北に位置する橋SX8453の中央付近でも細かく蛇行しながらほぼ南北に延び、上層園池北岸の築山SX8457の北端に向かって直角に向きを西に変える。この築山の北東部に設けた第12トレンチでも、その北辺延長部を検出した。

遺物

瓦　軒丸12点、軒平瓦7点の他、塼が出土した（表4）。

土器　唐三彩交胎釉の陶枕と思われる破片等が出土。

木簡　南面大垣下の南北溝SD5830から731点（うち削屑

軒丸瓦			軒平瓦			丸瓦	
形式	種	点数	形式	種	点数	重量	87.0kg
6133	Aa	2	6663	A	1	点数	785
	D	2		B	2	平瓦	
	Q	1	6681	?	1	重量	248.2kg
6146	A	1	6685	A	1	点数	1,955
6225	A	1	6691	A	1	塼	
	C	1	6721	Ga	4	重量	21.7kg
6282	E	2		?	3	点数	14
	Ia	1	6732	A	1	凝灰岩	
	?	2	型式不明		2	重量	2.0kg
6308	A	3				点数	2
6313	Ea	1				道具・その他	
6314	A	3				刻印丸瓦「理」	4
型式不明		6				刻印平瓦「理」	1
巴瓦		1					
軒丸瓦計		27	軒平瓦計		16		

表4　第236次調査出土瓦集計表

東院石組溝SD五八三〇B出土木簡

①
□□
「　」田部常万呂「　」　(216)・(30)・5　081

②
内□□［竪カ］　(123)・(9)・3　059

③・□□□
五稲人
・□□
「□」大万呂
「二カ」
「□」川成
「二カ」　(58)・(32)・2　081

④・八月下番□
・□□
□□□
［舎人カ］　(61)・(13)・2　081

⑤
左京天□□□□□［平神護二年カ］　091

⑥
□番長
「　」　091

⑦
麻呂年　091

⑧
□二月十日　091

⑨
夕百□［卅カ］　091

⑩
□上［去カ］　091

⑪
年卅一　091

⑫
□平□［天カ］　091

⑬
□位上［六カ］　091

⑭
□位下□［六カ］　091

⑮
従八位上大蔵　091

⑯
无位　091

⑰
散位　091

⑱
□弥侯□［吉　黄カ］　091

699点)が出土、勤務評定に関係する削屑の多いことが注目される。⑱の「吉弥侯」の表記は、天平勝宝9（＝天平宝字元年、757）歳に「君子部」が「吉美侯部」に改められ、その後「吉弥侯部」となったもので、これ以降のものである。「天平神護二年」(766) とよめる⑤とともに、この木簡群が破棄された年代を示唆するだろう。

まとめ

①園池と、園池地区の西限区画施設間の平坦部には上・下2層のバラス敷が敷設されていることがあきらかになり、植栽など、特定の部分以外では石敷舗装が施されていたと推定されるにいたった。

②園池南岸の岬は、これまで、上層園池にともなうものと考えられてきたが、下層園池ですでにつくられていたことが判明した。

③池の南半部で下層園池の池底を確認し、上層園池と下層園池の池底との差は南半部では数cmであることが判明した。一方、池の北半部では両期の池底の間は約30cmであり、場所によって、下層園池から上層園池への改修の程度が著しく異なることになる。湛水のあり方や排水の方法などについて、今後、より検討を深めなければならない。

④下層園池に先行する掘り込み地業SG5800Cは、池の南岸、東岸、北岸のそれぞれ一部での検出にとどまったが、池の基本形をなす掘り込み地業で、池の全域にわたって施工されていたことがあきらかになった。その形状は太い逆L字状で[1]、下層・上層園池の平面形とほぼ共通する。この形状は方形の西北角を欠いたものとみることもでき、7世紀代の方池との関連性も考慮すべきであろう。ただし、この掘り込み地業には、砂質土の地山を急勾配で掘り込んでいる場所もあり、SG5800Cが池としての機能を果たした時期があったのか、あるいは下層園池の造成のための工程の一つであったのか、今のところ未確定である。とはいえ、古代庭園の作庭技術をあきらかにする上で、興味深い事例である。

（内田和伸／計測修景）

註1）　本中真「平城宮東院庭園に見る意匠・工法の系譜について」『造園雑誌』第55巻第5号　1992